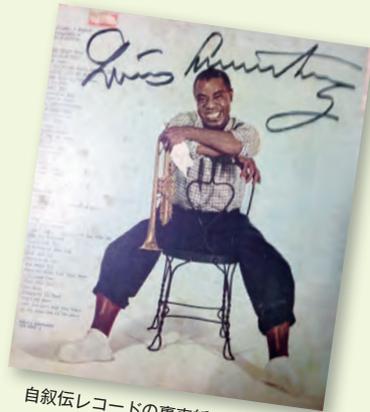


What a Wonderful World!

サッチモ音楽自叙伝
レコードアルバム、
サイン入り



サッチモと著者
ホテルのロビー
で、サイン入り

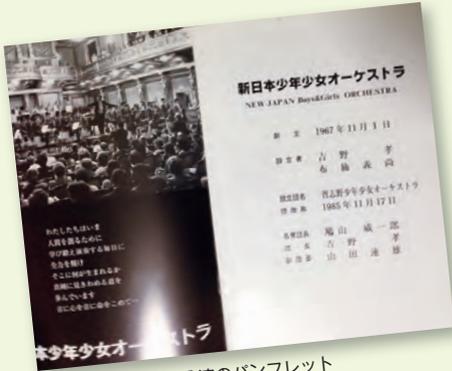


自叙伝レコードの裏表紙、サイン入り

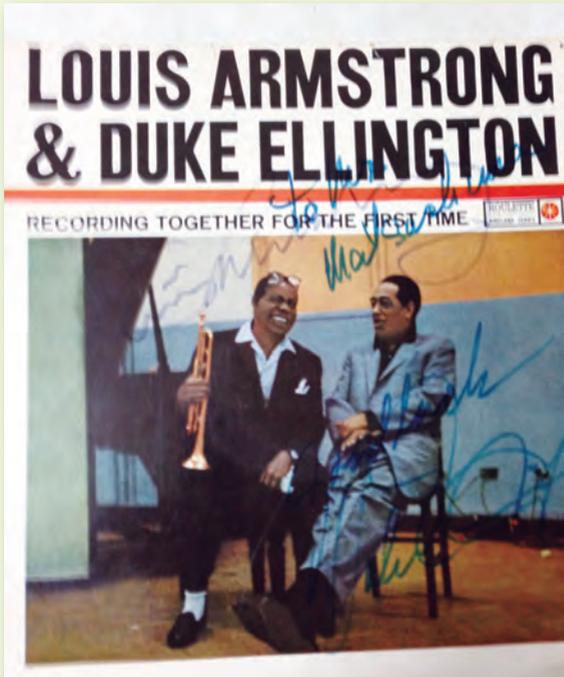
サッチモと著者、
サイン入り

What a Wonderful World!

映画「バックステージ」のパンフレット



日中公演のパンフレット



ブラザースフォー、レコードアルバム、サインとメッセージ

サッチモ&デュークエリントン、2大巨人のサイン入りお宝レコード

自伝的小説

この素晴らしき人生

—サツチモの歌が聴こえる—

62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42
「まこなお」のラブソングは凄い！……………	6000人から選ばれたヒロイン……………	映画「バックステージ」製作決定！……………	製作費1億5千万円……………	ハリウッド・アクターズ・アカデミーを舞台に映画製作……………	食えなくても、夢のある生き方は素晴らしい！……………	渋谷から新宿へ……………	7千万円は入っていた……………	新スポンサーはメディア・ジャパン……………	トイチ屋の紹介のスポンサー……………	あわや社長をクビに……………	一番好きなハリウッド映画「カサブランカ」……………	恐るべし関西弁……………	ハリウッド研修旅行……………	ハリウッドアクターズスクール……………	遠藤実作曲、52歳の新人歌手デビュー……………	ニューヨーク……………	マフィアの盃……………	アトランタオリンピック……………	神戸大震災と「すべての人の心に花を」……………	不朽の名曲「すべての人の心に花を」と喜納昌吉……………
132	130	129	128	127	126	124	123	120	119	118	116	114	111	107	105	101	98	95	93	91

81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	
エピソード……………	話せなかつた理由……………	佐知子に「バックステージ」のことを……………	タップ「みにくいアヒルの子」……………	主役になれないタップダンサー達とは一味違う！……………	天才タップダンサーは二人いた！……………	若きタップダンサーはジョン・コルトレーン……………	「愛の絆」とタップダンス……………	「愛の絆」舞台公演とタップダンス……………	「スタートライン」が名作と言われる理由……………	ミュージカル「スタートライン」……………	三木たかしの最後のCDは!?……………	金閣寺を親子で……………	杏子と京都で再会……………	杏子から電話……………	佐知子と杏子を会わせてやりたい……………	佐知子の愛猫トラの死……………	劇団アートシアター設立……………	ハリウッド・アクターズ・アカデミー閉校……………	映画「バックステージ」完成！……………
157	155		154	153	152	151	150	149	148	147	145	144	143	142	140	138	137	135	133

プロローグ

緑の樹が見える
紅いバラの花も

蒼い空
白い雲

空にはきれいな虹がかかり
なんて世界は素晴らしいのだろう！

これは、ルイ・アームストロングの大ヒット曲「What a Wonderful World」(邦題 この素晴らしき世界)の歌詞の一節です。

ルイ・アームストロングとは、ジャズの神様と言われ、20世紀のアメリカを代表する偉大な音楽家であり、
「サッチモ」の愛称で、世界中のファンに愛された世紀のエンターテナーです。

東京から、はるか離れた沖縄最南端の島、与那国島の断崖絶壁、東崎（あがりさち）で、眼下に広がる大海原を眺めながら、人生の終盤に差し掛かった音楽、イベント、プロデューサー赤松剛（あかまつごう）は一人サッチモの「この素晴らしき世界」を聴いていた。

1 サッチモと運命的な出会い!?

1947年、日本人初のノーベル賞を受賞した湯川秀樹博士が幼少時に学んだ、京都市立京極小学校の4年生の赤松剛は、何時もラジオから流れる音楽を聴いていた。

「憧れのハワイ航路」「湯の町エレジー」「東京キッド」など歌謡曲のヒットソングは一日に何度も流れてきた。

たまには、クラシック音楽の荘嚴な旋律が流れてくることもあったが、いい加減同じような歌謡曲に飽きてきたので、もっと違う音楽はないかと、ラジオのダイヤルを出鱈目に回していた。

とその時、これまで聞いた事がない音楽が聞こえてきた。

まさにそれは、頭のとっぺんから爪先まで電流が流れたようなショックを与えた。

剛はその音楽を忘れないように、何度も何度もメロディを口づさみながら、家の近く、河原町今出川にあるレコード店に駆け込んだ。

「いらっしやいー」と出てきたマスターに剛はメロディを口づさみ

「この曲ありますか?」と尋ねた。

マスターは黙って奥へ引っ込むと一枚のレコード盤を持ってきて、店の大きな電蓄（レコードプレイヤー）に掛けた。

「これか?」

「そう、それそれ!なんと言っ曲ですか?」

「これはね、『ベイジンストリート・ブルース』と言うジャズの名曲で、ルイ・アームストロングが

1928年に録音したものだよ」

「おじさん、そのジャズって何ですか？ ルイ何とかって誰なんですか？」

「ジャズってのは、アメリカで生まれた音楽で、アフリカから連れて来られた奴隷達が悲しみを紛らわせたり、喜びを表現したりする音楽のことで、ルイ・アームストロングは、ジャズの神様と呼ばれ尊敬される偉大な音楽家だよ。」とそのレコードを片付けながら

「だけど、坊やどうしてこんな曲を知ってるの？」と、不思議そうに尋ねた。

剛は偶然ラジオで聞いて、電撃的なショックを受けたことを話した。

「そうだったのか、ジャズの名盤を鑑賞する会が毎月第3日曜の1時から河原町三条のフルーツパーティーの2階で開かれるので、よかったら坊やを招待しよう」

当日、10名ぐらいの男達が、ビールやハイボールを飲みながら食い入るようにジャズの名曲に聞き入っていた。

剛だけは、アイスクリームをご馳走になりながらレコードから流れるジャズのリズムにウキウキしていた。後で判ったことだが、マスターは、ホットクラブ・オブ・ジャパンと言うジャズ愛好会の京都支部長だったのだ。

これが剛とルイ・アームストロングの運命的な出会いだった。

2 ヤクルト配達日本一!

剛は京都市立上京中学校という京都御苑（御所）の西北に在る中学校に入学した。

その頃、江利チエミの「テネシーワルツ」が大ヒットし、追っかけるように雪村いずみが「想い出のワルツ」「ブルーカナリィ」でデビューヒットを飛ばしたが、これらの曲も「ジャズ」と総称されることに、チョッピリ剛は不満だった。

剛が中学3年の年「ドラムブギ」と言う大ヒット曲で有名なドラム王、ジーン・クルーパが来日し、日本中に空前のジャズブームが湧き上がった。

そんなある夜、剛の父と母が声を潜めて話し合っているのが聞こえてきた。

「剛も高校へなど行かず、働いてくれるといいのにな」

母の声を聞いて、剛は

「そうか、我が家は貧乏だったのか」

と、初めて気が付いた。

「ようし、高校も仕事も両方やってやろうじゃないか!」

剛の行動は素早かった。

ヤクルトのS営業所で住み込み配達員を募集していると聞くと、直ぐに家を出て住み込み配達員となった。

高校は、京都府立鴨沂おうき高校だった。元々、この鴨沂高は1872年に、日本初の公立女学校として創立され、NHKの大河ドラマ「八重の桜」の八重もこの女学校で教鞭を執っていた由緒ある学校だった。

この高校は、進学校としても有名だったが、その校風は自由と革新だった。

荒神橋事件などという有名な火災瓶事件は殆どこの高校の生徒が引き起こしたもので、世間からは「アカ」のレッテルを貼られていた。

さて、ヤクルトの配達だが、高校生のアルバイトと言う事で、最初、営業所からは50軒の配達リストを渡された。当時、ヤクルトは1本5円で、このうち1円50銭が配達手数料だった。大学新卒の平均給料が4千円の時代であった。

いくら、住み込みで家賃は無料、朝晩2食付とはいえ、一日75円、月2250円の稼ぎでは、学費にしかない。

そこで、剛は他の配達員が嫌がる、岩倉、貴船、八瀬、大原などの遠隔地や、山岳地まで足を伸ばし・毎日、最低1軒の新規拡張をするまで学校に行かないと決めた。

配達本数が増えると、手数料が増える上に、1ヶ月の新規拡張の手数料が5円加算される。

こうして毎日新規拡張を続けた結果、一年後には一日の配達量がなんと3千本にまでなっていた。

S営業所の一日の出荷量が5千本の内、実に60%が若干17歳の剛の配達量だった。

因みに、この記録は当時日本一の記録として表彰された。

3 飲む、打つ、買う三拍子揃った高校生

ヤクルト配達日本一になったが、この量を配るのは並大抵のことではなく、朝まだ暗いうちに出て全部

を配り終わるのは夕方になる。

そこで剛は、中学生3人を下請け配達員として雇ったのである。

まとまったお得意さんを一人に約500軒ずつ渡し、商売道具の自転車、雨合羽等を買ひ与えるかわりに、剛は50銭をピンハネした。

それでも剛は約1500本は自分で毎日配達した。

朝5時位から配り始めても、10時頃まで掛かる為、剛は一時間目の授業は何時も欠席だった。

この頃には剛の収入は、毎月7〜8万円近くになっていた。

繰り返すが、大卒初任給が4千円の時代である。

こんなに稼いでも、所詮、高校生で、剛はお金の使い方を知らなかった。

一つには、時代の所為でもあった。

買いたい物が無かった。

現在と違って、海外旅行など簡単には出来なかった。

車など、大企業の役員や、官公庁だけが購入でき、庶民には手が届かない存在で、ましてや高校生には、いくらお金があっても買う対象物ですらなかった。

学費を払い、家に仕送りしても、使い切れない位お金はあった。

その頃の剛は、稼いだお金は使い切らなければならぬものだ、と思っていた。

必然的に剛は、「飲む」「打つ」「買う」の3拍子揃った、乱れた生活を続けた。

酒は浴びるほど飲んだ。

打つとはいつでも所詮高校生、せいぜい競馬や競輪に賭けるだけだが、剛はポーカーを好んだ。

買うほうは、剛は祇園乙部の女郎屋の息子だと噂されるほど派手に遊んだ。

それくらいしか、お金の使い方を知らなかったのである。

当たり前なことだが、学校の成績は稼ぎに反比例して急降下、高校2年の2学期にはとうとうオール1になつてしまった。

もともと剛は、たいして勉強もしないのに、小学校から成績は良く、中学2年ではオール5で、全校生徒中1番の成績を上げ生徒会長に選ばれた位である。

高校へ入学して最初の通信簿は、殆どが1だったので、両親は

「高校は、中学と反対で1が最高点だ」と、思っていたほどである。

4 女郎屋から高校通学

まだ「赤線」と呼ばれた売春街が在った時代であった。

京都の祇園は甲部と乙部に分かれていた。

甲部は有名な「一力」等の御茶屋が立ち並び、一見さんいちけん（初めての客のこと）はいくら大金を払っても紹介がないと決して入れてはもらえないくらい格式の高いみせばかりだったが、通りをはさんだ乙部は「泊まり700円」の売春街であった。